

みどり復興百年の大計

理事長 鈴木重吉

震災から二冬が過ぎ、今年も被災現場では雪消えを待つゆとりもなく、あわただしく現場が動いています。雪国の宿命とはいえ、余りにも一年の稼働期間が短い現実の中で不条理を感じながらも、懸命に復旧作業を進められる関係者には、ただただ頭が下がります。東京ではすでに中越震災は風化したとの話も聞きますが「冗談じゃない！これからが本番だ!!」と声を大にして訴えたい気持ちです。さて、長岡市では2度目の全日本花いっぱい大会が5月27・28日に全国から花を慈しむ同胞が一堂に会して開催されました。災害復興への祈りと市制施行百年をキーワードに、実行委員会をはじめ行政や多くの市民・団体のみなさまの協力によって成功させることができましたことに感謝申し上げます。

しかし、その感慨に浸る間もなく、みどりの復興はこれからが本番、現実を前にますます気を引き締め取り組んでゆく所存であります。

この全国大会が、あえて震災復興の真っ只中で開催された最大の意義が何処にあったのかを謙虚に考え、「新長岡市」の緑花によるまちづくり百年の大計が力強くそこから発信されますことを願ってやみません。

本年も協会の主力活動として第一に取り組みべき活動「みどり復興アクションプログラム」が、より具体的に動き始めます。持続性のある地域再生を念頭に置きながら被災地域の皆さんと一体となつて、かけがえのないふるさとの未来のために汗を流そうではありませんか。また、継続活動として、みどり百年の県民運動や緑化相談、講習会などの活動も多くの市民の参加を得て年々充実してまいりました。これらも復興へのエネルギーとして生かさねばなりません。いずれにしても、これからの百年のスタートとなる記念すべき年、覚悟も新たに「真に豊かな地域づくり」というテーマを地域の皆様と共有し、更なる発展につなげたいと念じております。

49回全日本花いっぱい長岡大会を終えて

理事 関川 淳

昨年の花いっぱい大会の日に、父親と、長男の三人で見附の親戚の家の竹林に竹を切りに行ったのを思い出します。あれから1年、ハイプの会場を飾った竹と、シルバードールを見た時、ある種の感慨がありました。

昨年の秋、大積の山で「竹取物語」、協会員と、市役所の方々とボランティアの方々として竹を切り出し、その竹を鈴木造園さんの倉庫に運び、冬の氷点下の中での竹の加工作業。

越路支所の倉庫での保管に、カビが生えるのではないかと、小林副理事長と心配したこと等々、いろいろな事が頭をよぎりました。飾り付けを終えた会場に入った時、今までの苦勞を忘れませんでした。今年は、四月の低温と日照不足で、花の広場の花の咲き方が遅かったりで、心配な事が多い大会ではありましたが、大会当日、快晴に恵まれ、大成功でした。



復興本番、まったなし!

(社)長岡市公園緑地協会

みどり復興アクションプログラム

公園緑地協会では去る5月29日開催された平成18年度総会において本年度の主力事業として「みどり復興アクションプログラム」の積極推進が満場一致で可決されました。それを受けて、鈴木理事長による講演が引き続き開催され、これまでの取り組みや1999年の台湾地震の現状と中越震災の復興に向けて参考になる事例の紹介がありました。

国の違いで支援制度は違いますが、地域コミュニティの醸成や持続性を高める手法など大いに参考になりました。以下、講演の抜粋を紹介いたします。

講演の内容 鈴木理事長

豪雪地帯の宿命とはいえ、被災地では今、復旧に向け各セクションにおいて昼夜兼行の必死の努力が続いています。関係各位には心から敬意を表したいと思います。

私たちが地域唯一のみどりの公益法人として復旧がよりスムーズに、しかも、持続可能な景観の創出・保全にむけ全力を傾け支援しましょう。震災以来、被災された多くの方々のお話を直接お聞きしました。想像を超える厳しい現実があることを承知すべきです。加えて、復旧支援システムが豪雪地バージョンでないことが一番のネック。工事期間も1年が7ヵ月足らずだというのが現実です。

慢性地すべり地域では二次災害も予測される中での懸命な復旧作業が続いており、まったなしの状況下に在ります。



講演会にて



H18.6 崩落法面の復旧状況



H18.6 急ピッチで進む復旧作業